



PETボトルをボトルtoボトルに資源循環しよう！自ら動く連携の輪が広がっています。

PETボトル、私たちも回収して 国内資源循環に取り組んでいます!!

PETボトルのリサイクルを進めていく上で事業系の回収品質の向上が課題です。事業系とは家庭から分別排出され市町村が分別収集する以外の、自動販売機、オフィス、スーパー・コンビニ、イベントなどから排出・回収されるPETボトルです。その事業系PETボトルを単品回収、ボトルtoボトルによる国内資源循環によるCO₂排出削減をする動きが本格的に始まっています。2025年は世界が注目する熱い街、大阪の最新動向をお届けします。

(取材日:2025年4月22-23日)

大阪・関西万博

分別した資源は
100%リサイクル
PETボトルはボトルtoボトル
キャップとラベルも有効活用



(左から)北川氏、岡野氏



9別の3Rステーション



回収PETボトルの処理設備

大阪・関西万博では、脱炭素や資源循環などに関する目指すべき方向性や中心となる対策について取りまとめた「EXPO 2025 グリーンビジョン」において、2005年開催の愛・地球博と国内2か所のアミューズメント施設をモデルケースに廃棄物排出量を推計するとともに、廃棄物の種類ごとに対策を講じた場合の削減目標やリサイクル目標を設定している。会場内で日々発生する廃棄物はリデュース・リユースにより最大限削減した上で、分別排出された「燃やすごみ」と「燃やさないごみ・混合廃棄物」以外のごみは、PETボトルを含めて分別・再分別を徹底することで100%リサイクルを目指しています。

グリーンビジョンの実現に向け、会場内に、3Rステーションを47か所、9分別の回収ボックスを設置。各所に分別誘導員が常駐して分別の案内を行うとともに、回収ボックスに二次元コードを貼付して、11か国語による分別方法を案内しています。

PETボトルはボトル・キャップ・ラベルの3つに分別されます。この他にも、協賛事業者の飲料メーカーから提供されたボトルtoボトルの回収ボックスも多数設置(無償貸与、万博終了後に返却)しており、飲み残し(液体)を廃棄するためのボックスも、別途用意されています。

こうして回収されたボトルは、会場内11か所あるサブストックヤードで分別・残留物など確認後、一時貯留します。その後、敷地内にあるメインストックヤードに集約されベール化までの処理が行われます。現在は、毎日3、4個ベール化されています。最終的に、回収されたボトルはボトルtoボトル(水平リサイクル)、キャップ・ラベルは製鉄所のコークス炉原料として処理されます。また、会期中、3Rステーションなどの運営方法を来場者数に応じて4つの段階に分けており、現在はまだ第1ステージ。今後、回収資源の増加を見込んで、ステージが上がるごとに回収頻度を増加するなど、その都度、改善を重ねて柔軟に対応する予定です。

6月には、来場する子ども・ユースを対象とした、環境問題の解決・SDGs達成に向けた体験型プログラム(ジュニアSDGsキャンプ)にて、PETボトルの水平リサイクルをテーマにプログラムが実施される予定です。来場者が会場で分別を体験することで、持続可能な社会に向けた行動変容とSDGs達成のきっかけにつながることを願っています。

公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会

持続可能性局 局長代行
兼上席審議役

岡野 春樹 氏

持続可能性局 課長代理

北川 健二 氏

株式会社 セレッソ大阪

スポーツから広がる
SDGsの輪
ボトルtoボトルで
ともに創る未来



セレッソ大阪ではクラブ設立30周年を機に、スタジアム内外全13か所ほどのエコストーションに新たに回収ボックスを設置。PETボトルは、ボトル・キャップ・ラベルの3種類に分別され、その要所ではセレッソ大阪スタッフが立ち合って指導後、回収が行われています。このステーションとは別に、2024年はSDGsブース、2025年はサステナビリティパークとして、回収とともに分別を学べるスペースを開設。分別することでその後、どう活用されるかなど、サポーターへの認知を目指し、啓発には所属選手も参加しています。

こうした活動の一環としてスタートした「Bottle to Bottleプロジェクト」は、パートナー企業である飲料メーカー協力のもと、使用済みPETボトルを回収。新しいボトルに再生するボトルtoボトル(水平リサイクル)がベースとなっています。毎試合ごとに回収量(袋数、重量)、CO₂削減量はリサイクル企業によって数値化され、それを毎試合ごとに掲示するなどしてサポーターに発信、共有しています。2024年度の年間実績は、PETボトルが重量で約4.6トンが回収され、約16万本分のPETボトルを再生。キャップは約0.2トンを回収。CO₂はPETボトルが約10トン、キャップは約0.7トン削減されている計算になります。

実際に回収が行われるホームゲームは、1シーズン19試合。そこでいかに多くの来場客にボトルtoボトルが理解され、PETボトルが資源であることを認知してもらえるか。合わせて、スポンサー企業や行政、学校など、ホームタウンを軸に活動を広げる目標もあります。他クラブとの情報交換も行いつつ、セレッソ大阪が見本となり、いざれはJリーグ全体で持続可能な社会づくりを実現できるよう邁進を続けます。

代表取締役 副社長 宮島 武志 氏

関西大学

「私たちは考動する」
学生主体で推進する
PETボトル回収



関西大学では2007年に環境憲章を制定し、環境保全に関するさまざまな取り組みを行ってきました。2018年には学長のもとで「KANDAI for SDGs推進プロジェクト」を設立。現在は2015年に設置した環境保全委員会とKANDAI for SDGs推進プロジェクトが連携し、学園全体の環境保全・SDGs推進活動を展開しています。加えて、プロジェクト公認の学生団体が積極的に活動をしており、この2つの組織と学生団体が連携して、学内外でのSDGs推進・啓発に取り組んでいます。近年、学生たちの関心は高く、教育面においては学部・学年を問わず履修できるSDGsラーニングプログラムを導入。環境保全やSDGsに関する科目を修得し、要件を満たすとデジタル証明(オープンバッジ)が発行されます。履修者が2,000名を超える「SDGsの実践」という人気科目では、PETボトルのリサイクルについても触れられ、多くの学生がリサイクルの現状を学びました。

PETボトルの回収は、関西大学SDGsパートナー企業である飲料メーカーが協力し、学内には2022年から自動販売機横に「水平リサイクルボックス」を設置。その一環で、学生団体が作成したポスターを貼り、正しくボトルを回収するための啓発活動を行いました。また、2024年にはボトルキャップのリサイクル業者とのパートナー登録を行い、千里山キャンパスの正門横インフォメーション前にキャップ専用の回収ボックスを設置。オープンキャンパスでもPETボトル・キャップのリサイクルを促すブースを開設しました。

今後もSDGsの達成ならびに持続可能な社会へ向けて、学生が主体的に「考動」するための正課授業に加え、セミナーやワークショップ、展示企画など、多様なプログラムを実施していきます。